
高齢者を対象にしたデス・エデュケーションの可能性

—あるがままの自分を認めるための援助方法として—

山本 哲也

1. はじめに

わが国の平均寿命は、1997年の統計によれば男性77.19歳、女性83.82歳となっている¹⁾。このような平均寿命の延びの要因としては、生活水準の向上、生活環境の改善、栄養の改善、医療技術の進歩などによる死亡率の低下があげられる（総務庁、1996）。平均寿命の延長は、日本人の定年退職後の生活も延長しており、仮に60歳で定年だとすると、定年退職後の余命は男性で17年、女性で24年あることとなる。しかし、いくら長生きをしても、そのためにかえって孤独になり、病気に苦しみ、あるいは体が不自由になり、そしてただ人から介助を受けているだけという状態では、高齢者は苦しいだけの長生きとなり、Q. O. L. (Quality of Life) の点から喜ぶべき長寿とはいえなくなる（日野原、1991）。つまり、定年退職後の20年あまりの老後の生活をよりよく生きられるかどうかは現代における重大な課題であると思われる。

老後の生活をよりよく生きるための方法として、しばしばあげられるものに生きがいづくりがある。高齢者が「働き、楽しみ、地域社会に貢献するなどさまざまな形で社会的に活躍」（厚生省、1997）する場をもつことで、生きがいのあるよりよい生活を送ることができるという考えである。

一方、西村（1998）は、高齢者が自然な人間らしい生を生き抜くためには、生きがいをもつだけでなく、自分自身の肉体的・精神的機能が衰退していくという事実を確認し、死を受容することが必要であるとしている。老いに伴う身体的・精神的な衰えは、先にあげた労働や趣味などの社会的活動を困難にする。このような活動の場をいくら作ったところで、衰退を認めなければ、結局、身体的・精神的な衰退におびえ、役割の範囲が狭まっていくことを嘆くことになる。また、死を受容することができず、拒否し続けるならば、悲惨な死を迎えることになる（西村、1998）。このような状況での生活ではよりよい老後の生活とは到底呼べないであろう。

ところで、最近、わが国では、死に対する関心が高まってきている。その要因として、嵯峨座（1995）は、次の3つをあげている。

まず、高度経済成長期に物質的ニーズが充足された結果、人々の関心が物から心へ、量から質へと変換し、Q. O. L. が問われるようになったことをあげている。第2には、高齢者の死亡率の顕著な低下による長寿の急進展の結果、死が高齢者の死に方の問題として問われるようになったことをあげている。そして、3番目として、死をめぐる科学が発達した結果、脳死問題や人工中絶など、死の問題とかわかる機会が増加したことをあげている。

死への関心が高まっているとはいえ、死に対する人々のイメージは決して明るいものではない。死に対するイメージの代表的なものが死に対する恐怖であろう。丸山（1992）によると、死に対す

る恐怖には、(1)肉体的苦痛に対する恐れ、(2)精神的苦痛（親しい者との離別）に対する恐れ、(3)地位、名誉、知識、財産への執着から生まれる喪失への恐怖、(4)ホモ・ロクエンス（ことばを話すヒト）が自ら作り出した不条理として死に相対せねばならないときの戦慄の4つがあり、中でも(4)が最も大きな恐怖であるという。ホモ・ロクエンス（ことばを話すヒト）が自ら作り出した不条理とは、人間が決して体験することができない死後の世界について膨らませるイメージのことであり、答えを知ることができないことについて、イメージを膨らませた結果生じた不安による恐怖である。

いくら死への関心が高まっているとはいえ、このような死に対する恐怖があっては、2人称の死や、死という事柄については語ることはできても、1人称の死、すなわち自分自身の死については話題にすることはもちろんのこと、自分自身で考えることすら困難を伴うと思われる。このことは、死が近づきつつある高齢者にとっては一層困難であると思われる。

したがって、老いに伴う身体的・精神的衰えの確認と、死の受容を促すような教育、すなわちデス・エデュケーションを行う必要があると思われる。

そこで、本研究では、定年退職後の老後の生活をよりよく生きることをめざす研究の一環として、高齢者に対するデス・エデュケーションの可能性について考察することを目的とする。

2. デス・エデュケーションについて

(1) デス・エデュケーションの歴史

デス・エデュケーションがわが国に初めて紹介されたのは、1980年代のことであるが、その流れは、大きく2つに分かれる。ひとつは、ホスピス運動の先駆者であるシシリー・ソンドース (Saunders, C.) がロンドンで開設したクリストファー・ホスピスでの実践の流れを汲むもので、ターミナル・ケアの分野で発展してきたものである。

もうひとつは、ロバート・フルトン (Fulton, R.) によってミネソタ大学に開設した Center for Death Education and Research というセンターでの実践研究の流れを汲むもので、死の問題を、医学的立場からではなく文化的・社会的立場から捉えたものである（堀，1998）。

アメリカでは、1963年にミネソタ大学で初めてデス・エデュケーションがカリキュラムに導入された。その後、1970年までに20の大学のカリキュラムに導入され、1976年には小・中学校でもデス・エデュケーションが取り入れられた。そして、1982年には一般の学部や社会教育の場でも「死」を学ぶ学習が定着している（西村，1998）。

わが国では、ホスピス運動の流れから、緩和ケアの実現などを目的に、医学教育や看護教育を中心に実践が行われてきた。しかし、最近では、子どもたちの自殺の増加や、子どもたちによる殺傷事件の発生などが契機となり、学校教育においてもその必要性が叫ばれている。

例えば、兵庫県神戸市教育委員会が設置した「心の教育緊急会議」は、1997年10月に「『心の教育の充実に向けて』—心の教育研究会議のまとめ—」を発表し、次のような提言を行っている²⁾。

「人間であるかぎり死を免れることはできない。死というものを意識し、自己の存在の有限性を自覚するとき、人は、かけがえのない人生の大切さを認識し、より豊かに、より積極的に生きることを考えていくものである。生と死に対する感受性が希薄になった今日、死をタブー視することなく、

子どもを亡くした親の体験談やペットの死などを通して、死を身近な問題として捉え、生と死の持つ意味を考えさせることが大切である。

子どもたちが成長の過程で、そうした悲しい死別を受け入れ、よりたくましく生きていくための支援をすることも大人の責務である。このため、子どもたちに豊かな人間関係を育むとともに、「生きることの大切さ」「生きていることの大切さ」「生かされていることの大切さ」を学ぶ教育を推進していくことが求められている。」

また、実際に学校教育や社会教育の場での実践も少数ではあるが報告されようになってきている^③。

（２）デス・エデュケーションの定義

デス・エデュケーションというと、わが国では、安楽死を学ぶ方法であるとか、どうすれば苦しまずに死ぬるかのように、死に方について学ぶ教育のようにとらえられがちである。欧米でのデス・エデュケーションについて研究をしてきた若林^④は、欧米におけるデス・エデュケーションを実際にみた感想を次のように述べている。

「こうやったら安らかに死ぬるんだとか、苦しまずに死ぬるんだということではなくて、やっぱり人生の質みたいなものに目を向けながら、人との交わりの中での生き方というものを考えるきっかけが、そこで提示されているのではないか、という印象をもちました」。

この感想からもわかるように、デス・エデュケーションとは、このような死の方法を習得することを目標とした教育ではない。

若林（1986）は、デス・エデュケーションについて、「決して避けることのできない死というテーマを通じて、人間、生命といったものを見直していこうとするものであり、自らのかけがえのなさを認識し、他を思いやる心をはぐくむ教育である」としている。

３．高齢者に対するデス・エデュケーションの意義とその内容

（１）高齢期における喪失

高齢者に対するデス・エデュケーションを考えるにあたっては、高齢期の特徴についてみなければなるまい。

高齢期の特徴の一つに、「喪失」体験をあげることができる。

高齢期には、我々は、さまざまな「喪失」を体験する（下仲，1997）。

高齢期に入ると、多くの男性が経験するのが定年退職である。定年退職は、経済的縮小による生活水準の低下を意味し、それまで築いてきた職業生活での社会的地位の低下を招く。

わが国では、仕事と自己を一体化させている男性が多い。定年退職までの30年近い年月を仕事へ没頭して費やした男性にとって、定年退職は人生における大きな喪失となる。

同様の喪失は、女性にとっては子育ての終了とともに体験することとなる。子どもたちが独立し、家を去ることにより、母親としての役割を喪失するのである。

配偶者との死別も大きな喪失である。高齢期においては配偶者の喪失を経験するのは、男性よりも女性の方が多い。しかし、現在高齢期にある女性は、男性と比べて社会的訓練を受ける機会が少

なく、夫に依存し家庭中心の生活をしてきたものが多い。このような女性にとって、配偶者との死別は人生における重大な喪失体験となる。

身体機能の老化も喪失体験を引き起こす。体力の低下も身体的喪失であるが、体力低下からくる病気は、健康の喪失となる。また、身体的機能の老化は、行動を制限し、自由な行動が制限される。さらに、記憶力の低下などの知能面での低下は、知識の喪失をもたらすこととなる。

老化の延長にあるのが死である。人は死によって、身体そのものを喪失するのである。

これらの喪失は、人々を不安にさせ、心理面に様々な影響を引き起こす。

(2)「持つ様式」と「ある様式」

Fromm, E. (1977) は、現代社会を私有財産、利益、そして力を存在の柱として、それらに依存した社会であるとしている。このような社会の様式を Fromm, E. (1977) は「持つ様式」とし、それに対比する様式を「ある様式」とした。

「持つ様式」とは、所有物を価値観の基準とした様式である。すなわち、才覚、気概、容貌、健康、体力、富、地位、職種、権勢などの所有物の多少によってあらゆる評価を行う。したがって所有物を多くもっているほど人は安心感を覚えるのである。

これに対して、「ある様式」とは、『持つ様式』、つまりあらゆる様式を減らす—すなわち、安心感と同一性とを見いだすために、持っているものにしがみついたり、くそれを抱いてくいたり、自我や所有物に執着したりしなくなる—度合いに応じてのみ現れるものである (Fromm, E., 1977)。

先にも述べたように、人間は高齢期になると様々な喪失を体験する。この「自分の所有物を失うかもしれないという恐れは、持っているものに基づく安心感」から生じるものである (Fromm, E., 1977)。

死に対する恐怖にも喪失からくる恐怖が含まれている。丸山 (1992) のあげた死に対する4つの恐怖、すなわち、(1)肉体的苦痛に対する恐れ、(2)精神的苦痛（親しい者との離別）に対する恐れ、(3)地位、名誉、知識、財産への執着から生まれる喪失への恐怖、(4)ホモ・ロクエンス（ことばを話すヒト）が自ら作り出した不条理として死に相対せねばならないときの戦慄のうち、(2)、(3)は、喪失からくる恐怖と考えられる。

(3)には、生命も含めることができると思われる。Fromm, E. (1977) は、死に対する恐怖を「生命を所有と経験される場合」に生じるものであるとし、「持っているものを失うことへの恐れ」であるとしている。すなわち、死に対する恐怖とは、「肉体、自我、所有物、同一性を失う恐れであり、同一性を持たず、く失われたく者の深淵に直面する恐れである」(Fromm, E., 1977)。

このように、死に対する恐怖を喪失からくる恐怖であると考えれば、死に対する恐怖を克服するには価値観の基準を「持つ様式」から「ある様式」へ転換すること、すなわち自らの生命をも含めた所有物に執着しないことによるしかないと思われる (Fromm, E., 1977)。

(3)高齢者に対するデス・エデュケーションの意義とその内容

これまで述べてきたように、高齢期には様々な喪失体験をする。

高齢期における喪失は、現代社会の人々が持っている価値基準である「持つ様式」によるもので

ある。そして、「持つ様式」における所有物には、地位、名誉、知識、財産だけでなく、生命をも含むことができる。西村（1998）のいう肉体的・精神的機能の衰退も含んでいる。

西村（1998）は、高齢者が自然な人間らしい生を生き抜くためには、生きがいをもつだけではなく、自分自身の肉体的・精神的機能が衰退していくという事実を確認し、死を受容することが必要であると述べている。

最近では、死に対する関心が非常に高まっており、雑誌や新聞記事に死が特集されたり、連載されたりすることもある¹⁰。しかし、いくら死に対する関心が高まっているとは言え、死に対する恐怖があれば二人称の死に対しては考えることはできても、一人称の死について考えることは難しいと思われる。つまり、高齢者が自分自身の死について自発的に考えることは難しいと考えられる。ここに高齢者に対するデス・エデュケーションの意義を見いだすことができるように思われる。すなわち、デス・エデュケーションが自分自身の肉体的・精神的機能の衰退の確認と自分自身の死の受容へのサポートとなると考えられるのである。

では、高齢者に対するデス・エデュケーションの内容とはどのようなものになるのだろうか。

自分自身の肉体的・精神的機能の衰退を認め、そして自分自身の死を受容するためには、まず肉体を含めたあらゆるものの喪失からくる恐怖と死に対する恐怖を取り除かなければならない。そのためには、Fromm, E. (1977) が述べているように、価値観の基準を「持つ様式」から「ある様式」へ転換すること、すなわち自らの生命をも含めた所有物に執着しないことによるしかないと思われる。

したがって、高齢者に対するデス・エデュケーションの内容は、「持つ様式」から「ある様式」への価値観の転換をサポートするようなものとなるであろう。

4. 高齢者に対するデス・エデュケーションの方法

では、「持つ様式」から「ある様式」へと価値観を転換させるようなサポートの方法にはどのようなものがあるのだろうか。ここでは、具体的に高齢期のデス・エデュケーションの方法について考察する。

自分自身の価値観を「持つ様式」から「ある様式」へと転換させるための方法としては、(1)死に関する専門家による講義、(2)ライフ・レビュー・セラピー（人生の見直しと再評価）、(3)「死後の生命」と「生まれ変わり」に関する科学的研究の紹介などが考えられる。

(1) 死に関する専門家による講義

デス・エデュケーションの実践報告の中には、生涯教育講座における報告がいくつかある（例えば、青木，1998；木村，1998；久家，1998）。これらの実践の多くは死に関する専門家を講師とした講義形式のものである。

死に関する専門家による講義の中には、これまでの人生を振り返り、自分自身の価値観の転換につながるものがあるようである。

例えば久家（1998）は、芦屋市の公民館講座で実施している「死を学ぶ講座」を報告している。

表1は、1990年に開催された「哲学講座－死生学ノート－」の内容である。「哲学講座－死生学

ノートー」は、全10回の講座で、国内の哲学者を講師に招き、ヨーロッパ、インド、中国、日本の死生観についての講義がなされた。

死生観に関する講義に関しては、A・デーケン（1986）が提示したデス・エデュケーションにおける15の目標⁹にも「個人的な死の哲学の探求」と「宗教における死のさまざまな解釈を探ること」として含まれている。

A・デーケン（1986）は、「個人的な死の哲学の探求」の内容について、「文化的・教育的背景によって制約された死に関する社会的・心理的・イデオロギー的固定観念から人間を解放し、異なる時代や文化における多様な死生観を提示して、各人が死について自分なりの個性的な理解を自由に選び取れるように積極的に援助すること」であるとしている。また、「宗教における死のさまざまな解釈を探ること」については、「各宗教の教義の共通点や相違点を知ることによって、自身の死生観を省察し深めるための刺激がえられる」としている。

久家（1998）は、講座を実施した感想として、参加者にとっては「自分の今までの生き方またはこれからの生き方にすごく共感と感銘をもたらす」ものであったと述べている。この感想からは、死生観について考えることが、自分自身の人生の価値観の見直しにつながることを示しているように思われる。

ところで、A・デーケン（1986）は、哲学を通じて行うデス・エデュケーションを大学生のための教育内容としている。一方、久家（1998）は、「哲学というのは、学生の時に机上でのみ学習するものではなくて、自分がある程度年齢も取り、いろいろ経験を積んできた方が、より理解できる内容だと痛感した」と述べている。久家の意見は、哲学、死生観に関する講義を高齢期に実施することの可能性を認めるものとなるであろう。

表1 兵庫県芦屋市立公民館「哲学講座－死生学ノート」の内容

回	内 容
1	哲学は死の稽古である－ソクラテスにとっての死－
2	死ぬまで生きる－イエスにおける生と死
3	生命はどこで終わってもそれがそのまま全体だ－モンテーニュの死生観
4	人はひとりで死ぬであろう－パスカルの死生観
5	死の恐怖を越えて－ドストエフスキーの死生観
6	死にかかわる存在－ハイデッガーの死生観
7	無益の受難－サルトルの死生観
8	輪廻と解説－ヒンドゥー教にみるインドの死生観
9	崑崙山と昇仙－古代中国の死生観
10	日本の民族と宗教－日本人と死生観

久家(1998)より引用

（２）ライフ・レビュー・セラピー（人生の再評価と見直し）

A・デーケン（1986）は、高齢者に対するデス・エデュケーションの方法の一つとして、ライフ・レビュー・セラピーをあげている。ライフ・レビュー・セラピーとは、人生の再評価と見直しを促す活動である。

A・デーケン（1986）は、「人間は遅かれ早かれ自分自身の死に直面し、物質的な財産のすべてを失うことになる。この現実を熟視するとき、物質的な財産の価値は相対的なものにすぎないことが明らかになる。それに対し、愛、友情、人格の高潔など、死によっても奪われることのない永続的な価値の重要性も改めて見出される」と述べている。A・デーケン（1986）のいう死とともに失う物質的な財産を重視する価値観から、死によっても奪われることのない永続的な価値観への転換とは、先に述べた、デス・エデュケーションの内容である「持つ様式」から「ある様式」への転換と同じである。

この価値観の転換のための具体的方法として、A・デーケン（1986）は、次のような演習課題をあげている。

- （１）あなたの人生で最も大切なもの（こと）を10あげてください。
- （２）それらのうちあなたが最も失いたくないものを一番にして、自分にとって大切な順に全部に番号をふって下さい。
- （３）あなたが実際に自分の人生（時間）をどのように使っているか、このリストと比べてみてください。
- （４）「10の最も大切な価値」のリストを見直して、今後のための新しいライフスタイルを発見して下さい。

（３）「死後の生命」と「生まれ変わり」に関する科学的研究の紹介

デス・エデュケーションあるいは死についての文献の多くに共通して記述してある内容に、「死後の生命」に関する記述がある。

例えば、池見（1986）は、「本人が『個』としての自己をこえた、永遠の生命界があることを信じるような生命観をもっていることが、真に平安な死の条件となる」としている。

A・デーケン（1986）は、デス・エデュケーションにおける15の目標の中に、「死後の生命の可能性について積極的に考察するよう促すこと」をあげている。

ところで、「死後の生命」については、現時点では科学的に証明することは不可能であるとするのが一般的な解釈のようである。しかし、欧米の死生学においては、「死後の生命」に関する研究が積極的に行われている。飯田（1995）は、欧米における「死後の生命」や「生まれ変わり」に関する研究成果をまとめたものである⁷⁰。この中で飯田は、死後生仮説の優位性について、（１）「死後の生命は存在しない」ことを「科学的に実証」することは不可能である、（２）「死後にも意識があった場合、否定論者は自分の誤りを知ることになるが、死後には無に帰してしまう場合、肯定論者の意識はなくなるため自分の誤りを知ることはない」という２つの観点を示し、『死後の生命』や『生まれ変わり』については、疑わしきは信じないよりも、たとえ疑わしくても信じた方が、むしろ理性

的なのである。しかも、これらについては、科学的に認めるか認めないかは別にして、個人的価値観として信じながら生活する方が、心理的にさまざまな利点を持つと考えられる」と述べている。さらに、「死後の生命」や「生まれ変わり」に関する研究結果を、情報として広く伝えることの意義について検討し、次のように述べている。

「我々は、『死後の生命』や『生まれ変わり』の知識を身につけることによって、自分自身の存在意義や人生の目的を問い直し、過去の人生や現在の状況がいかなるものであろうとも、そこには必ず重要な意味が込められていることを認識することができる。その知識は、『生きがいの源泉』の役割を果たし、自分を取り巻くあらゆる事象や人物、生物たちに対する『愛の源泉』にもなることだろう。その過程では、多くの人々が、価値観の本質的な揺らぎと転換を経験するに違いない。このような効果を、特定宗教を信じない人々や、宗教を拒絶する人々にも与えることができるという点が、『死後の生命』や『生まれ変わり』に関する科学研究を広く紹介することの意義であると言える」。

飯田（1995）が述べるように、「死後の生命」や「生まれ変わり」についての知識について、先入観を除き、積極的に考察することが価値観の転換につながるとすれば、デス・エデュケーションの有効な方法であるといえるであろう。

5. 高齢者に対するデス・エデュケーションの可能性

本研究では、定年退職後の老後の生活をよりよく生きることをめざした、高齢者に対する死の教育について考察してきた。最後に、高齢者に対するデス・エデュケーションの可能性について検討していく。

まず、第1に、我々は、高齢期にさまざまな喪失体験をする。この様々な喪失体験は、我々にとって、自分自身の人生を振り返る絶好の機会になるようである。例えば、肉親の死や癌などの重い病気は、命や死について考えるきっかけとして非常に大切な役割となるようである。

日野原（1987）は、このことについて次のように述べている。

「ある日親友の死にぶつかるとか、あるいは事業に失敗をするとか、あるいは非常に悲惨な体験をしますと、そこで初めて自分の人生というのは何であるかということを考えるようになるのです。命とか死とかを考えるのには、病気が非常に大切な役割をするんです。

これは、フランスのカントといわれた哲学者のメイン・ド・ピランの言葉です。『人間というのは、病気をしないと、生とは何であるか、ということはなかなか考えようとしません』。ところが、肉親のお父さんやお母さんが重い病気になると、自分とお父さん、お母さんとの関係はこれでいいのかというようなことを反省もしますし、また病気をしますと、やはりいつまでも生きられるものではない、死がくるんだということをしみじみ感じるようになります。

そして、その病気の体験を通して、自分の生涯、命を考えると同時に、病んでいる人というのはいったいどういう気持ちになっているかということを考え、また苦しんでいる友だち、病んでいる友だち、兄弟や親の気持ちや心情を少しずつ理解できるようになるわけです。だから、自分が病気

になることは肉体的にマイナスであるに違いないけれども、病むことによって人の悩みや苦しみ、あるいは病気になっている人の気持ちがよく分かるようになる。つまり、非常に人間としての感性が高くなって、人と話をするときに、心の底から話ができるようになるのです。」

このように、様々な喪失体験が自分自身の人生を振り返り、生や死を見つめるきっかけとなるのであれば、高齢期は、持ち物を重視した「持つ様式」中心の価値観から存在することを重視した「ある様式」の価値観へと転換するよい機会となり、ここに高齢者に対するデス・エデュケーションの可能性を見出すことができる。

第2に、哲学、死生観についての講義についての久家（1998）の意見が参考になる。先にも述べたように、久家（1998）は、哲学の学習は「自分がある程度年齢も取り、いろいろ経験を積んできた方が、より理解できる内容」であると述べている。この意見は、高齢期にデス・エデュケーションを実施することが人生を振り返るきっかけとなり、その結果、価値観の転換へとつながる可能性を示唆するものである。ここに、哲学、死生観に関する講義を内容としたデス・エデュケーションを高齢期に実施することの可能性を見いだすことができる。

第3に、「死後の生命」と「生まれ変わり」についての、カール・ベッカー博士の次のような発言が高齢者に対するデス・エデュケーションの可能性を示唆している⁽⁸⁾。

「日本は不思議な国です。明治以前には『霊』の存在を当然のこととしてきたのに、今では過去の欧米に追従して、この種の現象を真面目に考えようとしないう風潮が、特に科学者の間に強くあります。欧米諸国はこの方面で、ある意味ではむしろ昔の日本に近づきつつあるのに、逆に日本は、過去の欧米の水準から一步も進もうとしないのは、まことに皮肉というほかはありません。」

この発言からは、高齢期の人々が、かつては「死後の生命」や「生まれ変わり」を信じる文化の中で生きてきた、あるいはこのような文化の中で生きてきたものによって育てられたことを示している。また、現代日本は、物質的に豊かになりすぎ、量から質へとライフ・スタイルの転換が求められており、そのための方法としては、かつての文化を再考することが提案されている（やまだ、1998）。

このような状況を考えるとき、「死後の生命」や「生まれ変わり」に関する科学的研究の紹介は、高齢期にある人々から行うのが妥当であると考えられ、したがって高齢者に対するデス・エデュケーションが可能であるといえる。

以上の考察から、高齢者に対するデス・エデュケーションは、高齢者の特徴をつかみ、適切な方法と内容によるのならば十分可能であるといえる。

6. おわりに

本研究の目的は、定年退職後の老後の生活をより良く生きることを目指す研究の一環として、高齢者に対するデス・エデュケーションの可能性について考察することであった。

デス・エデュケーションとは、自らの死を見つめることにより、自分の歩んできた人生を振り返り、人間、生命といったものを見直し、自分を取り巻いている多くの事柄（もちろん人も含む）と

のかかわりの中での生き方を考えるきっかけを提供する活動である。そして、デス・エデュケーションの最終的な目標とは、あるがままの自分を認め、その後の人生をより充実したものとするところである。

日野原（1987）が述べているように、人間は生から死はなかなか考えられないものである。また、高齢期においては、死から生を考えることも自分一人の力では困難が伴うであろう。しかし、死を意識し始める時期であるからこそ、適切な方法を用いることにより、より効果のあるデス・エデュケーションが可能となるのである。

デス・エデュケーションは、研究も実践報告も数少なく、まだ多くの課題が残されている。その一つに、方法論の問題がある。本稿では、先行研究をもとに、高齢者を対象にしたデス・エデュケーションの方法の例をあげた。これらは、数少ない実践例の中からあげたものであり、決して十分なものとは言いがたい。しかし、多くの実践が行われる中で、さまざまな方法を提示することも可能であろう。高齢者を対象としたデス・エデュケーションの実践の場としては、公民館などで開かれる社会教育や定年退職後の生き方をテーマとした職場における社員教育、また、高齢者施設での実践も可能であろう。これらの実践的研究については今後の課題としたいと思う。

また、デス・エデュケーションは、高齢者に限らず、人生のあらゆる場で実践が可能なものであると考える。したがって、今後は、高齢者以外の人々を対象者としたデス・エデュケーションについての可能性を示すとともに、実践を報告していきたいと思う。

（やまもと てつや）

〈注〉

- (1) 厚生省ホームページ 報道発表資料「日本人の平均余命－平成九年簡易生命表」
(<http://www.mhw.go.jp/toukei/hp-ablif/index.html>) より引用。
- (2) 兵庫県教育委員会ホームページ(URL:<http://www.hyogo-edu.yashiro.hyogo.jp/~board-bo/kokoro/kokoro.html>) より引用。
- (3) 例えば、雑誌『AERA』（朝日新聞社）1997年12月22日号や読売新聞1998年5月7日号のほか、月刊社会教育No510では、“いのちと向き合う”をテーマに特集を組んでいる。
- (4) 文献5より引用。
- (5) 例えば『AERA』（朝日新聞社）では、「死の準備」という特集を組んでいる。また、毎日新聞でも、毎週土曜日に「最後まで自分らしく」というエッセイを連載している。
- (6) 文献1参照。
- (7) 詳細は、文献8参照。
- (8) 文献17、日本語序論文参照。

〈文 献〉

1. A・デーケン（1986）死の準備教育の意義－生涯教育として捉える：アルフォンス・デーケン編著，叢書 死への準備教育 第1巻『死を教える』，メヂカルフレンド社，1章，2-62.
2. 青木紘一（1998）学習内容の正面に「死」をすえる．月刊 社会教育，510，14-20.
3. Fromm, E. (1977) TO HAVE OR TO BE?. A Bantam New Age Book：佐野哲朗訳『生きるということ』，紀伊国屋書店.
4. 樋口和彦・平山正美編（1985）生と死の教育－デス・エデュケーションのすすめ．創元社.
5. 日野原重明（1987）いのちの質を問う：日野原重明著，日野原重明著作集 第5巻『対談 いのちと心』，中央法規出版，36-61.
6. 日野原重明（1991）研究委員会企画特別講演「老いと死の臨床」．教育心理学年報，30，28-32.
7. 堀 薫夫（1998）青少年へのデス・エデュケーションの可能性－メディア文化と殺意のはざまで．月刊 社会教育，510，41-48.
8. 飯田史彦（1995）「生きがい」の夜明け－生まれ変わりに関する科学的研究の発展が人生観に与える影響について－．商学論集，64（1），55-102.
9. 池見西次郎（1986）生と死を考える．学校保健研究，28（6），252-256.
10. 木村美和子（1998）生と死を学ぶ高齢者たち．月刊 社会教育，510，27-33.
11. 小林 司（1989）「生きがい」とは何か－自己実現へのみち．日本放送出版協会.
12. 厚生省編（1997）平成9年版 厚生白書－「健康」と「生活の質」の向上をめざして．ぎょうせい.
13. 久家登志子（1998）「死」を考える講座に取り組んで．月刊 社会教育，510，21-26.
14. 丸山圭三郎（1992）ホモ・モルタリス．河出書房新社.
15. 村島義彦（1990）「老い」と「死」を考える－生涯教育における後半の課題としての－．岡山理科大学紀要，26B，249-263.
16. 西村文夫（1998）“いのち”と向き合う学習の構築を．月刊 社会教育，510，6-13.
17. Sabom, M. B. (1982) Recollections of Death. Harper & Row：笠原敏雄訳『あの世からの帰還』，日本教文社，1986.
18. 嵯峨座晴夫（1995）死すべきものとしての人間．濱口 晴彦・嵯峨座晴夫編著，『大老長寿時代の死に方』，ミネルバ書房，序章，1，1-6.
19. 総務庁編（1996）高齢者白書．大蔵省印刷局.
20. 若林一美（1986）死の学習を通しての自己確認－アメリカのカリキュラムを参考に－．学校保健研究，28（6），263-267.
21. やまだようこ（1998）生涯発達心理学に「死生観」と「循環する時間」を．発達，76，18-22.

The possibility of Death Education for the Elderly — as a way of accepting things as they are —

Tetsuya Yamamoto

The purpose of this article is to show the possibility of Death Education for the Elderly.

The average life span of our country grows year by year, so it is a serious issue of the day whether we live better in the retirement and later life. To spend our remaining years in satisfactory, it is necessary not only to have the subject which is to be the value of life, but also to reconfirm the mental and physical decline, and to accept of our own death. However, many people have a fear of death. Recently, people have more interests in the death. Even if the death often becomes our topic, it is difficult to consider our own death. For the Elderly who feel death are approaching, specially, it is more difficult to think, so it is necessary to give Death Education, which is to reconfirm their mental and physical declines and to accept our own death, for the Elderly.

The proposal in this article is that the aim of Death Education is to change our values from “Having” to “Being” through the activities to consider our own death and to look back on our own lives.

Key Words:Death Education, The Elderly, Accept of Our Own Death